国立国語研究所学術情報リポジトリ

New usage of Japanese suffix teki

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金澤, 裕之, KANAZAWA, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002139

『日本語科学』17(2005年4月) 91-104 [研究ノート]

「～的」の新用法について

金澤　裕之
(横浜国立大学)

キーワード
「～的」，新用法，属性用法，主体用法，好悪の二元的感情

要　旨

本稿は，「気持ち的」や「わたし的」など，識者の間ではすこぶる評判が悪いが，その一方で，若者たちの間では広く使用され，且つ，その種類や機会を広げつつある「～的」の新しい用法について，それを単に批判するのではなく，語法や運用の面から分析を進めてみることによって，前向きに評価してみようとする試みである。

「～的」の新用法には，i）文頭にいきなり「～的」の語が来ること　ii）「～的」の後に「に」，その中でもとりわけ「には」が接続して，以下に文が続いてゆく場合が多いこと　iii）述語の部分には，二元的・絶対的な好／悪の感情を示す表現が来ることが目に付き，この現象は「わたし的」の場合に特に顕著であること，といった文法面での特色がある。そして，「気持ち的」に代表される「属性用法」や「わたし的」に代表される「主体用法」といったものに用法の幅を広げており，自身の気持ちや好悪の判断などを積極的な形で表明してゆくための語法として人々に受け容れられつつある模様である。

1. はじめに

印象としては1990年前後からのような気がするので，ここ十数年来ということになろうが，「気持ち的」とか「わたし的」といった言い方に代表される，それまで見られなかった「～的」の新しい表現形を耳にしたり目にすることが多くなってきている。こうした，謂わば「～的」の新用法は，新しいことばや用法の多くがそうであるように，識者の間ではすこぶる評判が悪く，批判されることが多いが，その一方で，若者たちを中心として，ますますその使用される機会や種類が広がっているように感じられる。やや旧聞に属するが，2000（平成12）年に行なわれた文化庁の調査でも，十代（16-19歳）の若者の42%が，「わたし的にはそう思います」という言い方をすることがあると答えており，この結果について新聞各紙では，断定を避けるこうしたあやふやな表現[1]が若者に広がっていると分析している。

むろん，こうした「～的」の新しい用法がどこまで広がってゆくかは不明だし，流行語一般のように，ある時期を境として全くと言っていいほどに廃れていってしまうという可能性もないわけではない。しかし後にも触れるように，一部は新聞記事などの通常の書きことばの中にも使われつつあるという事実を考えると，単にネガティブに批判するばかりではなく，こうした現状に至るまでの流れや背景について，ことばの面からも前向きに分析してみようとする試みがあって

も良いのではないかと考える。以下はそうした試みの報告である。

2. 先行研究

2.1. 先行研究の傾向

「～的」に関するこれまでの参考文献は，研究論文に近いと思われるものを実際に調べてみると，意外に多くないことがわかる。近年の堅実な成果の一つに山下(1999)があるが，そこで「参考文献」として挙げられているものは20に満たないし，その中には多分にエッセー風なものも含まれている。むろん，新聞や一般雑誌の記事の中で触れられている例は少なくないのかも知れないが，それらに当たるのは必ずしも容易なことではないので，ここでは上記の例を参考にして，先行研究の傾向について述べることにしたい。

今も記したように，参考文献は，学術的な論文とエッセー風なものとの二つに大きく分かれるが，その双方で主に触れられているテーマは，それぞれ大きく二つに集中しているように感じられる。まず論文の場合は，他言語（主に中国語）との対照や翻訳における問題などについて論じているものもあるが，多くは次の二つのテーマに集中している。

①「～的」の“～”の部分（前接語）の分析を行なったもの

②「～的」の意味や用法（機能）の分析を行なったもの

一方，エッセー風なものは，内容との関わりもあって，時期の面でも次に示すような二つに大きく分かれると考えられる。

③1950～60年代に多い，「～的」の濫用に対する警戒の声（その中心は，翻訳書や学術書などでの，書きことばに関するもの）

④1990年代以降の，従来とは異なった（と考えられる）用法の広がりに対する疑問の声（槍玉に挙げられる代表例は「気持ち的」「わたし的」で，主に話しことばに関するもの）

本稿で主に対象とするのは④についてであるが，①～③の点について，先に簡単なまとめをしておくことにしたい。

2.2. 先行研究のまとめ

上記の①の点に関しては，言及している論文が多いが，「～的」の使用実態についての計量的調査を行なっている南雲(1993)，丸山(1996)及び山下(1999)を参考にすると，新聞や雑誌における前接語の語種と意味分野は，次のような状況となっているようである[2]。

前接語の語種（異なり語）	
漢語	87～96%
外来語	3～8%
和語	0～3%
混種語	1～2%

前接語の意味分野（『分類語彙表』による）	
抽象的関係	32%
人間活動の主体	14%
人間活動　精神および行為	45%
生産物および用具	3%
自然物および自然現象	5%
固有名詞	1%

次に②の点については，これも当然のことながら言及している論文が多いが，用例（数）も含めて詳細な分析を行っている山下(1999)から，意味と用法（機能）に関する部分をまとめた形で引用してみることにする。

「～的」の意味

(1)「的」が前接語Aの表す属性概念で後接語Bを限定する役割を果たす。

「A性を有するB」「A（の／する）状態であるB」

e.g.）現実的政策・本質的問題・合法的移民

(2)「的」が比喩を表す助動詞と同じ役割を果たす。「AのようなB」

e.g.）家族的雰囲気・カリスマ的指導者・記念碑的作品

(3)「的」がある種の助詞や複合辞や語連続と同じ役割を果たす。

「AにおけるB」「AとしてのB」「Aについての B」「Aに対するB」など

e.g.）時代的要請・モデル的店舗・音楽的教養・宗教的感情

「～的」の用法（機能）

(1)「な」を後接する。(A的な～)　40%

(2)「に」を後接する。(A的に～)　35%

(3)「体言」を後接する。(A的B)　17%

(4) その他を後接する。(A的だ／で／と／の等)　8%

③に関しては，藤居(1957)が典型的なものなので，そこから一部引用してみる。

・的は，その場の気分で使われています。気分で使われているものが気分で聞かれ，気分で読まれるのです。〔中略〕先行の体言のもっている性質に近似するものを言い表わそうとする漠然たる意識以上のものは，この語の伝えあいには期待できません。それだけに使うには便利なことばです。いろいろ勝手な意味をもたせて変通自在な使いかたもできます。解釈も任意です。こんな理由の複合から的がむやみに使われるのです(p.72)。

2.3.「～的」の新用法に関して

先に④として示した，近年の「～的」の新用法に関して主に言及が見られるのは，野村(1994)，浅井他(1997)，朴(2000)である。そのそれぞれから，主に新用法への評価に関する部分を引用してみることにする。

a) 野村(1994)

・二，三年まえから気になっているいいかたに「気持ち的」というのがある。たとえば，野球中継で，解説者が「ここで，清原との勝負をさけたいのは，気持ち的には理解できるんですが，…」などといっている，あれである。いわんとしていることはよくわかるのだが，なんとなくしっくりこない(p.282)。

・「的」には，いろいろな用法があるが，このばあいは「…トシテノ」という意味がそれにちかい。「気持ち的に理解できる」というのは，一方に「論理トシテハ納得デキナイ」という意味をふくんでいる。つまり「理屈としてはわからないが，気持ちのうえでは理解できる」

というわけだ。「気持ち的」といういいかたに，おちつかないところがあるのは，まさに，この点だ。和語に「的」のついた「神がかり的」などの表現は，いずれも「…ノヨウナ」という意味で連体修飾語としてもちいられる。「気持ち的」は，そのワクをやぶったいいかたであるところに，特徴がある(p.283)。

b) 浅井他(1997)

「何々的」という次の表現の中で，不自然と感じるものがあれば選んでください。		
1	この服は「長さ的」にはちょうどよい	46.1%
2	「色的」に派手な車が通った	50.1%
3	「書類的」には全部がそろっています	52.1%
4	「気もち的」には理解ができます	33.6%
5	不自然と感じるものはない	9.3%
6	わからない	8.1%

・「的」は，一般には二字漢語の後に付く傾向があると考えられている。そして，その漢語もどちらかといえば抽象的なことばが多い。そういった経験からみれば，「長さ・色・気もち」などの和語に「的」を付けた用法は目新しい。また，「書類」といった具体物に「的」を付けるのも異例な用い方であろう。調査は，こういった「的」の使い方に対する，違和感の程度を探ろうというものだ(p.56)。

・それでは，「的」の多用，濫用が，和語まで巻き込んだ形で増えてきているのはなぜなのであろうか。『岩波国語辞典第5版』(1994)によると「何何的」には英語の-tic の音訳の外に，3つの意味が載せてある。(1)～のような (2)～の性質を帯びた (3)～の状態をなす。

(1)の意味の語の仲間に「貴族的・病的・動物的」などがある。これは「貴族・病気・動物」そのものを指すのではなく，貴族のような，または病気のようなといった，多少あいまいな，範囲を広げた言い方である。「～のような」というところに，断定を避けたり，あるいは断定できないものを説明するときの便利さがある。〔中略〕いずれにしても，伝えるべき内容をあいまいにする働きが，この「的」には備わっているようである(pp.58-59)。

c) 朴(2000)

・現代における「的」による表現は話し言葉でもやたら無秩序に使われているような気がする。(15)の例は，放送と新聞の会話文に現れたそのような濫用とも思われる「的」の例である。

(15) 小林さん的には何がいいんですか。
わたし的に言いますと，…
自分的には良いと思ったんですけど，…
貴さんはモテるんだよね。ボク的には…

世の中的にどう見られているのかねぇ！
隠れ家的存在のロフトバー
気持ち的に楽だよ。〔以下，省略〕(pp.170-171)

3. 異なった観点からの特色

以上見てきた通り，「～的」の使用範囲や頻度の広がりは，③の場合も④の場合も，識者の間ではすこぶる評判が悪い。ただし，既に過去の問題と考えてよいと思われる③の点に関しては，現在の様相から受ける印象としては，“濫用”の状態が「常態」となって一般には定着していると言っても良いのではなかろうか。

さて問題は，④の点についてである。前節に挙げたa）～c）の三文献はいずれも，基本的にはこうした「～的」の新用法に対して違和感を持ち，若い世代を中心とするその用法の広がりには不審の念を抱いているらしいことが分かる。そして，三者にほぼ共通する新用法の特徴への見方として，次の二点が挙げられている。

①前接語に，従来あったものとは異なるタイプの和語が来ていること
②「～的」が，「…トシテノ」といった意味を持ち，伝えるべき内容をあいまいにする働きを持っていること

確かにそうした傾向があることを，筆者も認めないわけではないが，a）～c）の引用部分に挙げられている10余りの「～的」の具体的な例文を見てみると，もっと単純かつ顕著な特色があることに気付く。それは一，二の例を除いて，他はすべて「～的に（は）……」の形になっている，ということである。言い換えると，

ｉ）文頭にいきなり「～的」の語が来ること
ii）「～的」の後に「に」，その中でもとりわけ「には」が接続して，以下に文が続いてゆく場合が多いこと

という文法（文の中での機能）面からの特色が，新用法では注目されるのである。更にもう一点，同様の面から注目に値すると思われる現象もあるが，その点については後に譲るとして，とりあえず上記の特色について，他の用例から検討を進めてみることにしたい。

4. 後接形態からの分析

本節では，前節の後半に挙げた，「～的」の新用法における文法面からの二つの特色について他の用例から数量的に調べてゆこうと思うが，そのうちのｉ）については，文の種類（会話文か否か）や文脈の受け取り方などによって，判断が揺れたり決定ができなかったりする場合が少なくないと考えられるので，そうした紛れのないii）の点について，用例検索を利用して調べてみることにする。

次に示す図１は，各種の「～的」の用例において，その中で「～的に（は）」の形式が占める割合を図示したものである[3]。なお，用例の検索にはyahooのホームページを利用し，その検索の総数を下段に数字（単位：千例＝百の位を四捨五入）で示しておいた[4]。なお，多種多様な

「～的」の中での一般的な後接形態の状況を見るため，既発表の山下(1999)における約２万２千例を今回の調査と同様の計算（注３の《　》内参照）によって「～的に」の割合を調べた結果，42.4%という数値が得られたので，参考のためにそれを最初に示しておいた。ただし，山下調査では「～的に」の内訳は調べられていないので，「～的には」の割合については不明である。

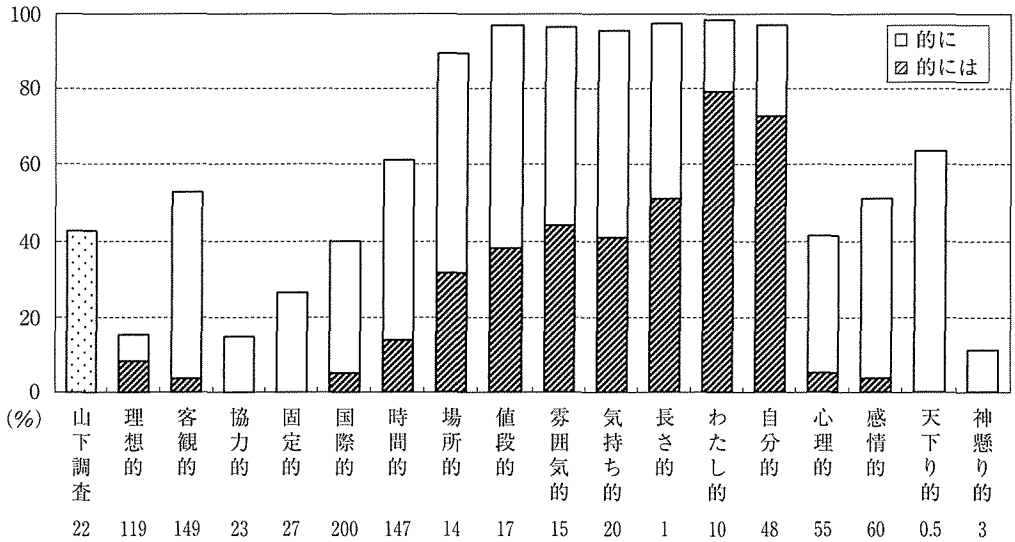

図１　総用例数に対する「～的に」「～的には」の割合

ここでは，17例の「～的」についての調査結果を示したが，それらの語例を選んだ理由は次の通りである。まず，「理想的」から「国際的」の５語は，原(1986)において漢語の語構造の面から大きく五つに分類されたものの中から，任意に１例ずつを選んだものである。これらは，山下調査の場合と同様に，一般的な傾向を見るために採用した。次の４例の「時間的」「場所的」「値段的」「雰囲気的」は，後に言及する筆者が女子大生に行なったアンケート（自由記述）において，漢語に「的」が接続するものの中で「～的」の新しい用法として意識されているらしいものであることから，調査対象とした。次の「気持ち的」「長さ的」「わたし的」「自分的」の４例は，言うまでもなく先行文献などによく取り上げられる例で，且つ，ある程度の数の検索結果が得られたものである。また最後の４例は，野村(1994)において「気持ち的」との関係で言及されているもので，「心理（的)」「感情（的)」は「気持ち」と類義の名詞として挙げられている例であり，「天下り（的)」「神懸り（的)」は，従来から用例が存在する，和語に接続する例である。

こうして，それぞれの「～的」の用例全体に対する「～的に（は)」の割合を調べてみると，その他の例と比較して，「場所的」から「自分的」の七つの語において，「～的に」全体の割合が90%を超えるという，かなり顕著な特徴を示していることが分かる。また，それらにおいては「～的には」の割合も比較的高く，特に「わたし的」「自分的」においては，「～的に」に含まれる用例のうちの大多数が，「～的には」の形を取っていることも注目される。

一方，この７例を除いた10例の場合は，一部（「天下り的」や「客観的」など）に「～的に」全体の割合が比較的高いものもあるが，これらの例においては「～的には」の割合は極端に低く，上記７例との分布の違い（棒グラフの差）は明らかである。ただしそうした中で「時間的」の場合は「～的に」全体の割合がかなり高く，且つ「～的には」の割合も相応に見られることから，両者の中間的な様相を示していると見ることも可能なように思われる。

5.「～的には……。」文型のもう一つの特色

前節では，３節の後半に挙げた，「～的」の新用法における文法面からの二つの特色のうちのⅱ）である，「～的」の後接形態に関して分析を進めてみたが，この節では，そこでのⅰ）の特色とも密接に関わる，先に留保しておいたもう一つ別の特色について考えてみることにしたい。

前節の初めの部分でも述べた通り，具体的な文の中で「～的」の語が（文中の）どの位置に出現するかという点については，判断が揺れたり決定ができなかったりする場合が少なくないと考えられることから，実例の分析によって検討することは差し控えるが，先に2.3節で引用した先行文献に挙げられている例からも分かるように，新用法の「～的」の語が文頭に来る例はかなり自然なものであるように思われる。また，前節で検討した通り，新用法の場合は「には」を後接する割合が顕著でもあるので，それを含む文は往々にして，『～的には……。』という文型を取ることが多いと考えられる。とすれば，次に注目されるのは後半の「……」のところ，つまり述語部分の性格についてということになる。

次に掲げる図２は，図１で利用した，yahoo の検索による，「国際的」「時間的」「場所的」「値段的」「雰囲気的」「気持ち的」「わたし的」の７語を含む『～的には……。』の文の最初の100例ずつ（重複しないもの）を，述語（「……」の部分）の表現内容の面から分析したもので，具体的には，「いい」「好き（だ）」「OK」「あり」「悪くない」／「ダメ」「イヤ（嫌）」「好きじゃない」「無理」「×（バツ）」などの形をとる，二元的・絶対的な好／悪の感情を示す表現が述語の部分に来ている場合を数えてみた結果である[5]。

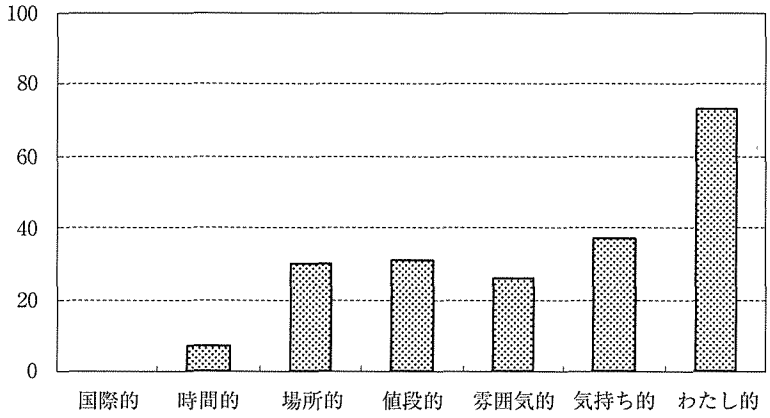

図２　述語の表現内容

むろん，それぞれの語自体の持つ語彙的な面での性格とも関わりがあるだろうが，グラフの結果から判断すると，「場所的」より右の新用法において述語部分に好悪といった二元的な感情を示す表現が多く見られ，この傾向は特に「わたし的」の場合に顕著であることが分かる。また，統計的な面での厳密な判断は難しいが，「国際的」＜「場所的」「値段的」「雰囲気的」＜「わたし的」，と三つの段階を描くような形で数値が変化してゆく中で，「時間的」及び「気持ち的」が，二つの段階変化においてその中間的な傾向を映し出していると捉える見方も可能なように思われる。

6. これまでのまとめ

3～5節において，「～的」の新用法の文法（文の中での機能）面での特色として本稿が指摘してきたのは次の三点である。

i）文頭にいきなり「～的」の語が来ること

ii）「～的」の後に「に」，その中でもとりわけ「には」が接続して，以下に文が続いてゆく場合が多いこと

iii）述語の部分には，二元的・絶対的な好／悪の感情を示す表現が来ることが目に付き，この現象は，「わたし的」の場合に特に顕著であること

こうした，形式や文法面からの特色と二つの図による分析，並びに先行研究の指摘などを総合しつつ「～的」の新用法の成立や広がり方を類推してみると，時期の点でははっきりしないところもあるが，次に示すⅠからⅢへの展開といったものが想定できるのではないかと筆者は考える。

Ⅰ．従来からの用法――それぞれの語によって割合は異なるが，一般には「な」「に」「だ」を後接する三つの用法（連体修飾・連用修飾・文末）を持ち，特に「～に（は）」の場合に偏ることはない。

Ⅱ．仮に「属性用法」とする――圧倒的に「に（は）」の後接する割合が高くなり，「～の面で（は）」といった，個々の属性面での評価を表わす用法である。その典型的な例として，「場所的」「値段的」「長さ的」「雰囲気的」「気持ち的」などが挙げられ，「～」に入る語の制限は緩く，ヴァリエーションはかなり多い。

Ⅲ．仮に「主体用法」とする――「には」の後接する割合が特に高く，「～としては」「～の立場では」といった，主体の立場や見方を表明する用法となる。「～」の部分には「わたし」や「自分」を初めとして，一人称を主とする人（称）を示す語が入る。また，述語には二元的・絶対的な好／悪の感情を示す表現が来ることが多い。

7. 女子大生アンケートの結果との関わり

前節でのまとめに関連して，2003年7月に女子大生に行なったアンケートの結果も興味深いものなので，次に紹介してみる。調査対象は，話しことばを中心とする最近の日本語の現象について考える授業の受講者52名である。彼女たちには，「～的」の新しいと考えられる用法を，出来

る限り文の形にして作るように依頼した。なお，この時点まで「～的」の問題については一切触れておらず，一人一人が全く自由に（いくつでも）例を挙げるように伝えて，こちらからは何の誘導も行なわなかった。その結果，集まった例は延べで241，「～的」の「～」の部分の異なりでは116語が挙がった。そして，この116語／241例を，前節のまとめに従って三つに分類したところ，「新用法」としての判断には少し迷うところもあったが，次に示すような結果となった。

	語（種類）	例（数）
Ⅰ（従来からの用法）	44	57
Ⅱ（「属性用法」）	38	62
Ⅲ（「主体用法」）	34	122

このうちまず，Ⅱの「属性用法」については，そのヴァリエーションの多様さが目に付いた。これまで言及してきた「場所的（２―用例数）」「値段的(3)」「雰囲気的(2)」「気持ち的(4)」などは勿論として，「デザイン的(4)」「状況的(2)」「天気的(2)」「お金的(2)」などの例が複数挙げられ，更に１例ずつではあるが「身長的」「試合的」「メロディ的」「バラエティー的」「見かけ的」「見た目的」「考え方的」「持ちやすさ的」などといった，これまであまり目にしない例も多数見られた[6]。ここに挙げた例からも分かるように，「～（的）」の部分に入る語は，漢語に加えて和語・外来語・混種語，更には接辞を加えた派生語にまで広がっており，今後も更に多様化してゆく可能性が強いと考えられる[7]。

一方，Ⅲの「主体用法」に関しては，ここでもヴァリエーションの広がりが注目される。先に，このⅢに分類されるものは34語／122例あることを示したが，それを更に，「～」の部分が，①“自分”に当たるもの　②（自分以外の）人や人称代名詞などを示すもの　③（それ以外の＝人ではなく）組織や団体など　の三つに分けてみると，その状況は次のようになった。

	語（種類）	例（数）
①“自分”に当たるもの	6	58
②（自分以外の）人や人称代名詞	16	44
③（人ではなく）組織や団体	12	20

①については後で詳しく触れるので，まず②について見ると，「△△（相手の名前）的(13)」「△△ちゃん的(9)」「あなた的(3)」などの予想しやすいものに加えて，多くは１例ずつではあるが「彼的」「彼女的」「あっち的」「子供達的」「男的」「お母さん的」「親的(2)」「先生的(6)」などの例が見られ[8]，語彙的な広がりの様子が窺える。また，ここで特に注目されるのは③の場合で，主体が人の場合から更に広がりを見せ，「学校的(6)」「X（学校名）的(2)」「会社的」「テレビ的(3)」「お店的」「Y（店名）的」「係り的」「キッチン的」などの例が見られる[9]。こうした例は，筆者自身も調査以前には予想していなかったものであり，語法の簡便さも手伝ってか，あたかも「増殖する」といった勢いで急速な広がりを見せつつあるようである。

こうした全体の状況の中で，やはり最も注目されるのがⅢ「主体用法」の①，「～」が“自分”に当たるものの例で，前述の通り合計58例が数えられ[10]，この例を挙げた学生は全体52人のうちの実に49人（94%）を占めた。そして，「わたし的」を代表とする，こうした「“自分”的」の部

分を中に含む58の例文を更に詳しく分析してみると，次に示すような結果となった。

A：文の中の位置　　文頭：57　　文中：1[11]

B：後接形態　　「には」51　「に」 5　「にも」1　「で」1

また，「“自分”的に（は，も）」が文頭に来る57の例の述語部分を，前節で挙げた「二元的・絶対的な好／悪の感情」に照らして調べてみると，結果は次のようになった。

C：述語部分　「好」：26（46%）――「いい」「OK」「あり」「好き（だ）」など

「悪」：12（21%）――「好きじゃない」「違う」「ダメ」「無理」など

その他：19（33%）――「こう（だ）」「××（自分の意見）だ」など

好悪の感情を示すものの合計の67%というのは，図2における「わたし的」の場合の73%と似通った数値であり，ここから「“自分”的には……。」という定型的な表現が，女子大生たちにも好んで使用されているらしい状況を窺うことができるように思われる。

8. 新聞の用例からの検証

最後に，これは（話しことばではなく）書きことばの例ということになるので，参考としての意味しか持たないかもしれないが，時代的な流れや変化の様相を探るために，同一メディアでの経年的な出現数調査の結果を参照してみることにしたい。次に示す図3は，朝日新聞オンライン記事データベース「聞蔵（きくぞう）」を利用して，図1で問題となった「場所的」「値段的」「雰囲気的」「気持ち的」「わたし的」の5語の，1984年8月以降の年次ごとの出現数を記録したグラフである[12]。

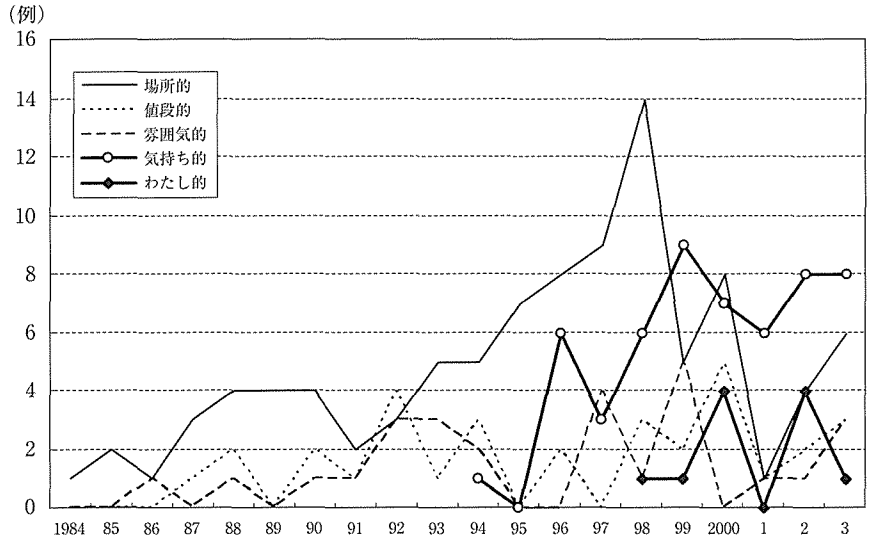

図3　朝日新聞における年次ごとの「△△的」出現数

たまたま出現した数を数えるという調査方法から，ある程度の凸凹は致し方ないと考えられ，また出現数も1年に5例以下の場合が少なくないが，ここで興味深いと思われるのは，1980年代

から比較的安定した出現数を示す「場所的」「値段的」「雰囲気的」の3語に対して，94年から出現してその後急激に数が増える「気持ち的」，98年から姿を現わす「わたし的」と，同一新聞への出現状況という点で，三つの異なるパターンが見られることである。もちろん，『朝日新聞』というメディアの性格や，新語・新用法といった語例の性格から，その出現年度は実際の（社会での）話しことばへの登場からは時間的にかなり遅れているであろうことが予想されるが，三つのパターンの時間的な懸隔や順序といったものは，新用法としてのⅡからⅢへの展開と関わって，興味深い事実を示しているように感じられる。

というのは，先に図2のところでも言及したが，「気持ち的」が，Ⅱの「属性用法」からⅢの「主体用法」への橋渡しのような役割を果たしたのではないかという推測である。言うまでもなく，「気持ち」というものは主体である「誰か」の気持ちを表わすものであり，例えば「気持ち的に理解できる」というような表現の場合は，主体としての「わたし」が裏に当然含意されており，「わたしとしては理解できる」というのとほぼ同義に当たると考えられる。そして，この「わたしとしては」の部分が汎用性の高い「～的」の形式を受け入れたとすれば，そこに「わたし的には理解できる」という表現が成立する。更に，一旦「わたし的には……」という形が定着したとすると，「……」の部分に「属性用法」の場合とも繋がる話者の印象面での評価や見方を示す表現が入ることは，自然な流れのように感じられるのである[13]。

9. おわりに

以上，これまで考えてきたところをまとめてみると，「～的」の新用法の広がりは前接語の多様化や「～的」の意味の広がりといった，謂わば語レベルの変化に止まるのではなく，そこから進んで文法としてのレベルや，更に言えば話者の表現方法に関わるレベルにまで，その特色が及んでいると考える方が自然ではないかと思う。既に何度か触れたように，「～的」の新しいと考えられる用法については，主に若者たちに好まれ，「あいまいで，断定を避ける表現」の一つとして，その多くは否定的に評価されることが多い。確かにそうした面もあるかもしれないが，その一方で自分自身の気持ちや好悪の判断などを積極的な形で表明してゆくためのストラテジーのようなものとして，ポジティブに受け容れられていると考えることもできるのではないだろうか[14]。

「はじめに」にも記した通り，今後の変化については全く予想がつかないが，新用法の定着や展開について，変わらぬ興味を持ってこれからも注目してゆきたいと思う。

注

1 「～的」の他にも，「～のほう」「～とか」「～かな，みたいな」といった表現が，同様の例として挙げられている。なお，「ワタシ（私）的には…」は2000年の「日本新語・流行語大賞」トップテンに選ばれており，こうした点からも，世間一般から注目された表現であることが分かる。

2 山下(1999)の示す数量的な割合は，『日本経済新聞』のCD-ROM（1994年版）から採集した22201の用例を分析したものである。以下でも同様。

3　2節の先行研究のまとめでも示したように，「～的」に後接する形式としては，「な」「に(は)」「だ」「で」「と」「の」，及び，他の名詞（「～的B」の場合）が考えられる。ただし，検索の方法上の問題として，多様な名詞(B)の来る可能性がある「～的B」の用例数を調べることは不可能であり，また「△△的」の形で検索を行なうと「△△」と「的」とが必ずしも接続していない例をも拾ってしまうため，便宜的に，《「△△的な」～「△△的の」の全用例数に占める「△△的に（は)」の割合》で計算した。なお，念のために付記しておくと，各棒グラフ全体は，「～的には」を含む「～的に」全体の割合を示しており，その下方の斜線部は，その（「～的に」の）中に占める「～的には」の割合を示すものである。

4　yahooによる検索結果は日々変動するので，ここで示す数字は目安としてのものである。因みに，今回検索した分は，2004年4月6日（火）に行なった結果である。また，HP検索では同じものが重複してヒットすることが時々あり，今回の調査における冒頭の100件中には2～6件の重複が見られたため，そこからの類推では全体としての重複が4％程度あることが推定される。ただし，この条件はどの語の場合にも同様に当てはまることを考慮して，数値の調整は行なわなかった。

5　多様な述語に対する判断には個人差が多いと考えられたので，大学院生を含む研究者3名で全用例（計700例）を調べ，その平均値を示した。

6　「身長的」から「持ちやすさ的」の8例については，以下に具体例を示しておく。

・AくんとBちゃんはラブラブだけど身長的に合わないよね。
・試合的には面白いけど，私は納得いかない。
・「あの歌いいよね。」「メロディ的にはいいけど，詞がちょっとね…。」
・バラエティー的には面白いけど，問題だよね。
・（ちょっと良さげな人がいて…）見かけ的にはいいんじゃない？
・この家は見た目的に悪いなぁ…。
・あの子とは考え方的に合わないよ。
・持ちやすさ的にはあのバッグがいいけど，デザイン的にはこっちのが可愛い！

7　なお，主に連体修飾用法に関するものではあるが，句や文レベルの形式に「的」が接続する場合については，山下(2000)が詳しく論じている。

8　「彼的」から「先生的」の8例については，以下に具体例を（1例ずつ）示しておく。

・彼的には別れたくないんじゃない？
・彼女的には，辛いことだよ。
・あっち的にはよくても，うちらはよくないよね。
・「子供達はどう思うかな？」「子供達的にはイヤがると思います。」
・「どんな女の子がモテるんだろうね？」「男的には，ブリッ子が好きなんじゃない？」
・お母さん的にはダメ？
・親的には苦しい選択だったネ。
・なんか，先生的には気に入らないらしいよー。

9　「学校的」から「キッチン的」の8例については，以下に具体例を（1例ずつ）示しておく。

・それって学校的にはいいのかもしれないけど…。
・X（学校名）的には今回の事件をどう思うんだろうね。
・会社的にはOKらしいよ。
・テレビ的には，これってダメじゃない？

・「このお店，趣味が悪いよね。」「まぁ，お店的にはいいと思ってやってんじゃない。」
・Y（店名）的にはくつろぎ重視でしょ？
・係り的には，参加して欲しいな。
・「お勧めメニュー出してもいいですか？」「キッチン的にはOKだけど，ホールは大丈夫？」

10 内訳は，「わたし的」44，「あたし的」2，「△△（自分の名前）的」5，「自分的」3，「ボク的」1，「うちら的」3，である。

11 文の中の位置が「文中」で，後接形態が「で」となった1例は，次の通りである。
・「それはうちら的じゃないよねー。」

12 グラフが煩雑になるため，以下に示す理由で，時間的・長さ的・自分的の3語は割愛した。
時間的――毎年，最低でも90例以上あり，このグラフには適さないため。
長さ的――検索したが，1例もヒットしなかったため。
自分的――「わたし的」とほぼ同様の分布を見せているため。

13 「わたし的」の場合以上に，その成立過程の証明は難しいと考えられるので注で述べるに止めるが，図1・2，及び図3の場合（グラフにはないが，用例は多数存在――注12参照）を総合して考えると，「属性用法」の成立には，そのような働きをする「時間的」の用例の中の一部のものが関係していると言えるかもしれない。

14 些か唐突かも知れないが，「ぜんぜん」と肯定形との共起を論じた野田(2000)の「まとめ」の部分には，本稿で報告した「～的」の新用法の背景と通じるところがあるように思われる。ただし，その証明はほとんど不可能のように感じられるので，ここではそのことを指摘するに止めておく。
・本稿では，「ぜんぜん」と肯定形の共起について，主に，次の三点を述べた。
1）「ぜんぜん」は，「違う」「だめ」ととくに共起しやすい。これらは，①絶対的基準と非連続的に異なる状態を表し，基準からの離れ方の大きさを「ぜんぜん」によって表しうる，②絶対的基準と非連続的に異なる状態であるということ以外の語彙的意味をあまりもたない，という共通点がある。これらと似た性質の話は「ぜんぜん」と共起しやすい。〔2)は省略〕
3）「ぜんぜん　いい／大丈夫」などの許容度が若い世代で高いこと，若年層では「ぜんぜんおいしい」のほうが「ぜんぜんまずい」より許容度が高いことなどから，「「ぜんぜん」＋肯定形」は，現在，好ましい状態を述べる性質を強めつつあると考えられる(pp.180-181)。

参考文献

浅井真慧・深草耕太郎・坂本充(1997)「第7回ことばのゆれ全国調査から②―「何々的」で不自然なもの」『放送研究と調査』97/5，56-59，NHK放送文化研究所
遠藤織枝(1984)「接尾語「的」の意味と用法」『日本語教育』71，125-138，日本語教育学会
南雲千歌(1993)「現代日本語の「～的」について」『ICU日本語教育研究センター紀要』3，72-98，国際基督教大学日本語教育研究センター
野田春美(2000)「「ぜんぜん」と肯定形の共起」『計量国語学』22-5，169-182，計量国語学会
野村雅昭(1994)「キモチのわるい話」『日本語の風』，282-283，大修館書店
朴大王(2000)「接尾辞「的」について―話し言葉における「的」を中心に―」『言葉と文化』1，163-

180，名古屋大学大学院国際言語文化研究科
原由起子(1986)「―的　－中国語との比較から－」『日本語学』5-3，73-80，明治書院
広田栄太郎(1969)「「的」という語の発生」『近代訳語考』，281-303，東京堂出版
藤居信雄(1957)「的ということば」『言語生活』71，71-76，筑摩書房
藤居信雄(1961)「的の意味」『言語生活』119，80-83，筑摩書房
文化庁(2000)『平成11年度　国語に関する世論調査』，文化庁文化部国語課
丸山千歌(1996)「英語の接尾辞“－tic”の訳語「～的」について」『ICU 日本語教育研究センター紀要』6，15-42，国際基督教大学日本語教育研究センター
水野義道(1987)「漢語系接辞の機能」『日本語学』6-2，60-69，明治書院
山下喜代(1999)「字音接尾辞「的」について」『日本語研究と日本語教育』，24-38，明治書院
山下喜代(2000)「漢語系接尾辞の語形成と助辞化」『日本語学』19-13，52-64，明治書院

付記

本稿をまとめるにあたり，山内博之・橋本直幸の両氏から多大なご協力をいただいた。また査読者の方々からは有益なご指摘をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

（投稿受理日：2004年６月１日）
（改稿受理日：2004年12月５日）

金澤　裕之（かなざわ　ひろゆき）
横浜国立大学教育人間科学部
240-8501　横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
kanazawa@edhs.ynu.ac.jp